

# アジアにおける神学の課題

——M.M.トーマスの場合——

竹 中 正 夫

## はじめに

日本を含めてアジアのキリスト者に問われていることは、アジアの土壌においていかにキリスト教信仰を把握し、表現し、それに根ざしていかに生きるかという課題である。それは、キリスト教がそれぞれの時代においてちがった文化や社会と出あうたびに経験してきた古くて新しい課題である。それは、一定の状況や時代にキリスト教を適合させるという単なる応用の問題ではない。キリスト教自体が抽象的概念として真理を理解するのではなく、きわめて具体的に歴史的状況にロゴスが受肉したという啓示認識に基盤をもつ宗教であり、存在、「あるもの」(being)は歴史的過程に「なりてあるもの」(becoming)として表明されている。有賀鉄太郎教授の初期の主著である『オリゲネス研究』は、ヘブライ的な背景をもったキリスト教が、ギリシャ的な文化と出あったときに、形成されたキリスト教思想の解明をしたものであり、そのライフワークともいふべき『キリスト教思想における在存論の問題』は、聖書的神観からみたキリスト教の存在論の歴史的展開を扱ったものであった。<sup>1)</sup>

有賀教授とともに、歴史神学の形成に尽力された魚木忠一教授は、『日本基督教の精神的伝統』において「日本国民の宗教的精神が基督教精神に触発することに依って生れた」日本類型の性格について吟味している。<sup>2)</sup>これらは、今日のアジアの神学の課題に光を投げかけている先駆的な業績であるといっても過言ではない。今日キリスト教が、アジアの国々の伝統的な思想、既成の諸宗教、そして歴史的な文化と出あい、かつ、現実の社会的課題に直面し、聖書の福音に対し、どのような理解と応答をなしているかが、ますます重要な課題と

なっているときに、これらの先人たちの労作には再評価されるべき意義がある。

いまここに、とりあげるM.M.トーマスの場合においては、伝統的宗教思想としてヒンドゥ教との関係がとわれ、社会的問題としては、植民地支配からの解放と、解放後のインドのナショナリズムや最近のインドラ・ガンジー政権下の緊急下(1975—77)の課題が問題とされると思う。後者の社会的課題に対するM.M.トーマスの態度については、わたしは、すでに別の論文で扱ったので、ここでは主とし、彼のヒンドゥ教に対する考え方に焦点をあてて吟味してみたいと思う。トーマスが問題としているヒンドゥ教は古典的な原始ヒンドゥ教ではなく、インドの文化的ルネサンスといわれる近代的ヒンドゥ教の後興過程である。彼は、その過程において、ネオ・ヒンドゥの指導者たちが、イエス・キリストにどう出あい、どのような応答をなしたかを問うている。トーマスのアプローチは、彼の多年にわたる広い社会実践を経てきたものであるとともに、その対話が、諸宗教の既成の教義の比較研究ではなく、相互の交流と触発によって、お互い同志が何を学び、どのような解釈と表現をとりつつあるかという、きわめて生きた経験の交錯を示唆しているように思う。

### M.M.トーマスの人となり

M.M.トーマスは、1916年5月16日、南インドのケララ州のトラヴァンコラ(Travancore)で生れた。普通M.M.の愛称でよばれているが、Madathil parampil M. Thomasが正式の名前である。彼の生れたケララ州は、南インドの西海岸沿いの州で、古くから交通が開かれ、西欧との接触の窓口となった地方で、民度は高く、インドの中でも識字率が一番高く、社会的な関心も強く、有力な人材を輩出している州として知られている。

M.M.トーマスの両親は古い伝統をもつマトマ教会(Mar Thoma Syrian Church of Malabar)の会員で、彼もその信仰をうけついで。M.M.は、学生時代には化学をトリヴァンドラム大学(Trivandrum Science College)および、マドラス大学(Madras University)で学び1935年に卒業した。卒業後トラヴァンコラの高校で教えたり、コタヤム(Kottayam)の近くのマンガナム

(Manganam)にあるキリスト教のアシュラムに住んだり、トリヴァンドラム市の浮浪者や流民の世話をする働きを諸宗教の協力を得てすすめたりした。

しかし、このような治癒的な社会奉仕に満足出来ず、さらに社会変革の現象を学びそれに対応する神学を学ぶため、バンガローの社会事業兄弟団 (Social Work Brotherhood) の一員となって社会に対する神学的理解を深めるとともに、マルクス主義の研究にあたった。のちに、第一時大戦後、M.M.はニューヨークのユニオン神学校で同様の研究をつづけた。

バンガローにおける研鑽を了えると、M.M.は、マンガナムのアシュラムに本部をおく、ケララ青年キリスト者協議会の幹事としてインドの独立運動や、社会主義の運動に積極的に参加していった。ケララ青年キリスト者協議会は、聖書研究、祈祷、断食、労働、などについて厳格な規律を設け、諸大学にグループを結成し社会的な活動の推進にあたった。浮浪者や乞食の世話や飢饉による犠牲者の救済などの問題にとどまらず、多くの社会的矛盾をはらんだカスト制度や結婚のときの持参金制度 (dowry system) などの課題にも取り組んでいった。M.M.トーマスの生涯を通して変らない二つの強調点を彼の青年時代の働きにみる事が出来る。すなわち、一方においては、聖書に根ざした精神的な力の涵養であり、他方においては、社会的な、そして構造的な悪に対して戦うという倫理である。この二つは、M・M・ののちの働きにおいても変らないリズムとなってすすめられていた。ちょうど、ディートリッヒ・ボンヘッファーが、一方においてヒットラーの独裁的専制にプロテストしながら、他方においては、秘儀保持の規律 (Arkan Diziplin) として交わりにおける聖書研究や礼拝そして聖餐や祈りを重視したことに相通ずるものがある。われわれは、礼拝と社会活動、祈りと労働、そして、聖書研究と社会実践を二分することは出来ない。

こうして、M.M.はケララ州におけるキリスト教運動の若い指導者として認められるようになり、1939年にアルウェイ (Alwaye) で開かれたWSCF (世界学生キリスト者連盟) の指導者会議に出席し、エキュメニカル運動のサークルで知られるようになり、1947年から50年にかけて、WSCFの幹事をつとめた。この間、1948年に日本を訪ね、戦後の学生キリスト者運動の指導者たちと

親交を深めている。

そのときM.M.トーマスは京都に来て、同志社大学の此春寮に泊った。世話人は、酒井哲雄氏であった。わたしは、その当日の会合に何かの都合で出席出来なかったが、翌朝便所ではったり出あった。すその長い白いインド服をまわっていた。これが有名なM.M.トーマスかと思った。彼は32才、わたしは23才であった。そのときの漂然さらりとしたM.M.の風貌はいまも変りない。

その後インドのNCCの社会的文書委員会の幹事として働くかたわら、WSCFの副委員長をつとめ、1954年から、インドのNCCが設けたインドキリスト教社会研究所 (Christian Institute of the Study Society) の幹事となった。また、そのころからはじめられたWCC (World Council of Churches) の「急激な社会変革がなされつつある地域に対する教会の共同の責任」(Common Christian Responsibility Toward the Areas of Rapid Social Change) に関する研究のアジア担当幹事として働き、インド宗教社会研究所 (Christian Institute for Study of Religion and Society) の副所長として P.D.デバナンダン所長と協力して特色ある研究を推進し、多くの業績を発表した。<sup>3)</sup>

M.M.トーマスの生涯のなかで、彼に強い影響を与えたのは、ポール・デバナンダンであったが、彼は同時に、彼の師(グルー)であった。デバナンダンが1962年、日本に旅立ちを前に不慮の死をとげたあと、M.M.トーマスは、インド宗教社会研究所の所長となった。従来から外側からみていた者は、デバナンダンが宗教の方を担当し、M.M.トーマスが社会問題を扱うという分業があると思っていた。しかし、デバナンダンの死後、M.M.は所長になって、従来から培って来た社会的関心にあわせて、在来のインドの宗教・文化についての研究を深めていった。ある点では、M.M.トーマスは、デバナンダンなきあと、デバナンダンの志をついで、その課題をになって、さきに進んでいったといっても過言ではない。とりわけ、M.M.トーマスが最近にあらわした二冊の書物において、彼のインド思想と文化との対話の成果をみることが出来る。

#### 先駆者ポール・デバナンダン (1901—1962)

M.M.トーマスに深い影響を与えたポール・デバナンダンに触れておきた

い。デバナンダンは、1901年南インドのマドラスに生れた。マドラスやハイデルバッドなどで学んだのち、しばらく、スリーランカのジャクナで教鞭をとり、さらに、マドラス大学で研究をつんだ。彼はインドのキリスト教会の指導者K.T.パウロの影響をうけ、1924年から25年にかけて、パウロの秘書として米国に赴いた。<sup>4)</sup>引きつづいて、約7年間彼は米国に留った。はじめは太平洋神学校に学び、のちにイエール大学で研鑽に励み、博士号を得た。彼の論文題は、「マヤの概念」であり、1950年に出版された。インドに帰ってからデバナンダンは、バンガローにある合同神学校で宗教史ならびに宗教学を約17年間教えた。その後、1956年から同じくバンガローにあるキリスト教宗教社会研究所の所長をつとめ、キリスト教とインドの宗教、文化、社会の関係について研究を促進していた。1961年にニューデリーで開かれた世界教会協議会の第三回大会で「証しへの召命」(Called to Witness)について講演をするとともに、ニューヨークのユニオン神学校に再度招かれて客員教授をつとめるなど巾ひろく活躍をした。

デバナンダさんが、海外にあって神学教育をうけた時代は、リベラリズムが批判され、バルト神学が抬頭し、ネオ・オーソドックスの流れが強くなった時代であった。ヘンドリック・クレマーの『非キリスト教的世界におけるキリスト教の使信』<sup>5)</sup>が出版されたのは、1939年であり、デバナンダンは大きな影響をうけた。クレマーの立場は自由主義的な立場から諸宗教間の比較検討をなすのでなく、神からの啓示がイエス・キリストの出来事にあらわされたという事実根ざして、諸宗教との間に質的な相異(discontinuity)を認めるものであった。デバナンダンは、クレマーの立場を受けいれながらも、バルトやクレマーが、「神からの啓示」(from God)を強調するあまり、この世において、他者と共に生きる面(to and with the world of men)が稀薄となったことを痛感するに至った。クレマー自身もこの点を認め、1960年に出版された『世界宗教と世界文化』においては、断絶的な立場から相互理解の方向にやや緩和したが、基本的には、啓示中心の立場は変らなかった。

デバナンダさんも、根本的には、聖書に示された、イエス・キリストの啓示を基盤とすることには変りはなかった。その点において、キリスト教の正統的な

信仰にインド的なものを付加して折衷的なものをつくる意図はなかった。彼は、キリスト教の啓示にあらわされている独自性を稀薄にさせてまで、インドのヒンドゥー的状况に適合させようとしたのではなかった。それでは、デバナンダンが意図したものはなんであったのか。彼は、対話を通してキリスト者がヒンドゥー教を内側から理解し、今日の社会においてヒンドゥー教が生きた宗教として働くために、自らの中に宗教改革の必要性をヒンドゥー教徒が自覚するようにはかることを意図した。彼はこういつている。

「インドにおけるキリスト教の伝道者の使命は、世俗主義や無神論に対する反対をとることでなく、町であろうと村であろうが、そして、すべての文化の次元において、ヒンドゥー教が、真の宗教の本質を再把握するようにつとめることである。<sup>6)</sup>」

ここにおけるデバナンダンの問いは、ヒンドゥー教徒をキリスト教会員とする戦術ではなく、むしろ、神は、近代から現在に到るインドの歴史において何をなしつつあるかを問うことである。ヒンドゥー教との関係についていうなら、インドに普遍的な勢力をもつ古い伝統的なヒンドゥー教の教義や習慣と現代のインドの社会変革にともなう民衆の要請との間のギャップをいかに埋めるかという課題に、キリスト者が、理解ある友としていかなる助力をなし得るかという問いである。幸いキリスト教思想にふれ、あるいは、世界の諸文化との交流に刺激をうけて、ヒンドゥー教の中に、ルネサンスがおこりつつある。1961年12月にバンガローで開かれたWSCF（世界学生キリスト者連盟）の協議会でヒンドゥーの学者の講演のあとのディスカッションで多くの参加者たちが、バルトやクレマーの立場から、キリスト教の啓示の独自性を主張し、ヒンドゥー教とキリスト教の相異点に関心を深めていたとき、デバナンダンが立って、インドにおいてはもっとちがった視点からヒンドゥー教の講師の講演を理解する必要があることを説いたことをわたしは印象深く記憶している。デバナンダンは、そこで話された講師の立場は、ネオ・ヒンドゥーの立場であり、それが、古陋なヒンドゥーとどうちがいが、インドの今日の問題にどういう役割りをもっているかを詳し

く説明し、その点から積極的な評価をなした。ヒンドゥ教からキリスト教に何人の改宗者を出したかということを問うのも一つの立場であるが、デバナンダンの関心は、神は、「ヒンドゥ教のルネサンスにおいて何をなしているか」という問いである。この問いを継承していったのが、M.M.トーマスである。デバナンダンは、この問いをすすめるにあたって、つぎの四つの概念をめぐる考察をなしている。1、人格 2、創造 3、歴史 4、共同体 この四つの点について、古いヒンドゥ教の理解を説明し、キリスト教の考え方を提示し、ヒンドゥ教の自己変革の過程を示唆している。デバナンダンは多くの論文を書いたが、組織的な書物はのこさなかった<sup>7)</sup>。M.M.トーマスはデバナンダンの問題意識と手法をうけついで研究をすすめ、この問題についての成果をのちにのべる大著にまとめたのであった。

### M.M.トーマスのアプローチ

さきにのべたようにM.M.トーマスは、デバナンダンの死後、インド宗教社会研究所の所長となったが、同時に、エキュメニカル運動においても重要な役割を果たすようになった。1966年ジュネーブで開かれた教会と社会の世界会議で議長をつとめ、1968年から75年までは、WCC（世界教会協議会）の中央委員会の委員長の重責を果たし、アジアのキリスト者として、世界の教会の一致のために貢献をなした。

1977年、彼は61才を迎え、インド宗教社会研究所長の仕事を、S.チャタジー教授に委ね、自らは、故郷ケララ州に帰って、ケララ地方の言葉であるマラヤラム語で聖書の註解書を著述し出版するという仕事にとりかかった。引退をするというには未だ若い年であったが、多年にわたって基礎づくりをして来た研究所の仕事は、後進にまかせて、自らは、樹下静想の人となっていて、ふるさとの人々と聖書研究に励むあたりいかにもM.M.らしい第二の人生の過ごし方であるといってもよい。彼は現在までに創世記、出エジプト記、ルカによる福音書、使徒行伝、コロサイ書、テサロニケ前後書など7巻を完成している。1975年から77年にかけて、ガンデー首相の強権発動によって全インドが緊急令下におかれたとき、M.M.トーマスは、基本的人権と社会正義の確保のため懸命な努力をし

たことは広く知られている。<sup>8)</sup>

M.M.トーマスの最近の書物でインドの宗教思想ならびに社会思想との対話において注目すべきものはつぎの二つである。

**The Acknowledged Christ of the Indian Renaissance, SCM, London 1969, p. 340.**

**The Secular Ideology of India and The Secular meaning of Christ, CLS, Madras, 1976, p. 207.**

M.M.はインドの思想家によくみられるように必ずしも体系的に書物を著述するというよりは、そのときどきのテーマに応じて講演をなし、それらを集めて論文集として出版することが多かった。一つ一つがエッセイとしてまとまっており、そのときのテーマに応じた分析と検討がなされているが、それらは断片的なうらみを禁じ得ず、宗教・社会思想との対話を全体としてとらえる集中した業績とはなり得なかった。その点から上の二著は、体系的な著述として広く注目されるものであり、デバナンダンから受け継いだ、宗教社会対話の精神の結実をみることが出来ると思う。

この点からも、前記の『インドのルネサンスにおいて認められたキリスト』は、M.M.トーマスの著書のなかでも一つのエポックを画した力作であるといってもよいであろう。

この書物が刊行されるにあたって一つのエピソードがある。1966年から67年にかけてM.M.トーマスは、ニューヨークのユニオン神学校でヘンリー・ルース客員教授として、「インドにおける神学的課題」について講義をしていた。M.M.トーマスの妻、ペナマ (Pennamma) 夫人は、もともとケララ州で物理学の教師をつとめていた。M.M.トーマスが、ニューヨークに行くことが決ったときユニオンにおける講義を書物としてまとめるようにすすめたのは彼女であった。彼女は、M.M.がすぐれた洞察力をもち、他人の論文を集めたり、協議会の報告書をまとめたりして、書物を出版したが、自分自身の著述をまとめることが少かったことをよく知っていたからであった。この間、彼女は癌を患い入院し治療を受けることになった。3ヶ月の療養生活が続いた。こうした

苦悩のつづく病床でも彼女は、いくつか残っている章を書きあげるようにM. M.にいった。

「癌とのたたかいを荷ない、愛する者の死のおそれにおびえるときは、復活の福音の意味を考えるのに悪いときではなかった。しかし、それは、著述に適したときでは決してなかった。しかし、わたしは筆を少しづつ運ばせた。なぜなら、はじめの危機が去って、小康を得たとき、彼女は、この地(Vellore)を去る前に、わたしが残りの部分を書き上げるように切望した。その通り、ついにわたしはついに仕上げる事が出来た。だから、本書を彼女に献呈する特別の意味を読者はくんで下さることであろう。わたしは、多くの人々や、イデオロギーやそして神学の間をさまよってきたが、その間にあって、彼女のキリストを中心にした誠実さと、わたしがますます依存していた彼女の直観的な精神的洞察力にわたしは衷心から感謝の意をあらわしたい。<sup>9)</sup>」

1969年12月本書は出版され、M. M.はロンドンから送られたコピーをもって夫人の病床を訪ね出版をよろこんだ。夫人はその二日後すなわち、1969年12月22日に世を去った。本書の扉に記されている「ペナマに」(To Pennamma)という二語には、深い意味がこめられているのである。

## 対話の内容

さきあげた二つの書物において、M. M.トーマスはインドの状況におけるキリスト者と他宗教の人たち、ならびに他のイデオロギーをもつ人たちとの対話について検討をしている。『インドのルネサンスにおいて認められたキリスト』においては、主として、ヒンドウ教の近代の思想家達をとりあげ、キリスト教と出会うことによって、彼らがキリスト教からいかなる影響をうけ、インドの近代化の過程において、ヒンドウ教の新しい展開をなして来たかを詳述している。さらに、後者の作品、『インドの世俗的イデオロギーとキリストの世俗的意味』においては、インドの近代の社会的展開において、国家主義、社会主義、共産主義、反ブラマン主義 (Anti-Brahminism) などがインドではどのように展開したかについて、それぞれの社会思想の内容を論述すると共に、そ

の底流にある宗教思想や精神的価値は何であったかをうきぼりにし、キリスト教とのかかわりを問い、それぞれに評価を加えている。前者は、インドの近代化におけるキリスト教とインドの宗教思想との対話の書であるとするなら、後者は、インドの社会思想との対話の書であるといつてよい。

この二つの書物は、M.M.トーマスの主著の双壁として長く残るものと思う。彼がここで示しているアプローチは、アジアの神学形成に深い示唆を与えている。M.M.トーマスは、デバナンドンが問うた問、すなわち、「神は、インドのヒンドゥ教の復興の中で何をしているか」という問いを、さらに深め、広め、実証的に、具体的な人物の思想内容を分析、吟味し、対話の内実を例証している。たとえば、後者の『インドの世俗的イデオロギーとキリストの世俗的意味』においては、国家社会主義(Samyavada)の立場に立って、戦争中は日本やドイツにも亡命して、インドの独立のために苦闘したS・チャンドラ・ボーズ(Subhas Chandra Bose)、はじめは、マルキストとして出発しながらも、のちには、新しいヒューマニズム(New Humanism, Integral Humanism)の立場に立つようになったM.N.ロイ(M. N. Roy)、そして、フェイビアン社会主義の流れをくみ、会議派(Congress Party)に反対して結成された自由主義的な保守党(Swatantra Party)の指導者、M.R.マサニ(M. R. Masani)などをとりあげて、それぞれの思想内容の分析をなし、西欧の思想、とくにキリスト教の影響、それに対する反応を論述し、評価と位置づけを行っている。これは、単なる伝記でもないし、社会思想史でもない。インドの近代社会思想における、キリスト教思想と伝統的思想の交流史といつてもよいものである。ここに彼は、人間学と神学の交錯をみ、インドの世俗的ヒューマニズムとの出会いの中に、インドの神学形成の端著を見出している。

### 宗教対話の吟味

M.M.トーマスは、宗教対話の研究を、前記の主著『インドのルネサンスにおいて認められたキリスト』では、どのようにすすめているのであろうか。彼が取り扱っている課題や方法について考えてみよう。

第一にあげられることは、同書のタイトルからみて、R.パニカー(Raymond

Panikkar)の書物『ヒンドゥ教の隠されたキリスト』(The Unknown Christ of Hinduism, 1964)との相異点を考えてみる必要がある。第一の相異点はパニカーが、古典的ヒンドゥの教義を対象としているのに対して、トーマスは、近代のネオ・ヒンドゥを扱っていることである。第二、パニカーが、古典的ヒンドゥのなかにキリストの働きが隠されていることを指摘するのに対して、M.M.トーマスの場合は、近代の西洋文化、とりわけ、キリスト教との接触の中で、ヒンドゥ教の中に変化がおり、キリストと出あったヒンドゥ教の思想家たちが、積極的にキリストを認めていることに力点をおいている。一方は、古典に隠されたキリストであれば、他方は現代にあらわされたキリストであるといってもよい。さらに、第三の相異点をあげると、パニカーは、ローマ・カトリックの背景をもち、トーマス・アクイナスの神学から、ヒンドゥの古典的経典(Veda)にむかっているのに対し、M.M.トーマスの場合は、マトマ・オーソドックスの宇宙観に立って、近代のインドの歴史の変革のなかで生きて働いているキリストにふれて、ヒンドゥ教徒自身が自己変革をとげつつある姿をえがいているのである。パニカーの方が理念的であり<sup>スチフツ</sup>静的なアプローチであれば、M.M.の方は、はるかに、歴史的であり、<sup>ダイナミック</sup>動的なアプローチである。ヒンドゥ教の表現を用いるなら、パニカーの方は敬虔的伝統(bhakti tradition)に通ずるのに対し、M.M.トーマスの方は、行動的伝統(karma mārga tradition)をより重視しているといつも過言ではあるまい。

第二に、M.M.トーマスが取り扱っている主なヒンドゥ教の思想家をあげ、その扱い方を検討してみたい。トーマスが主として取り扱っている近代のネオ・ヒンドゥの思想家たちは、つぎの六人である。(1) R.ロイ(Rammonhan Roy)。彼は、インドの民族主義の指導者であり、ヒンドゥの改革者のひとりであった。1820年に、イエスの教説について著書をあらわし論議をかもし出した。<sup>11)</sup>(2) K.C.セン(Keshub Chunder Sen)。彼は、ネオ・ヒンドゥ主義の指導者として、伝統的なヒンドゥの神秘的精神主義を復興した。諸宗教の調和に関心をもったのみでなく、キリストの中に聖なる人間性を発見し、多くのインド人に、キリストを伝えた。(3) P.G.モゾーダル(Pratap Chander Mozoo-<sup>12)</sup>mdar)。彼は、センの弟子としてその影響をうけ、師の伝記を書き、さらに、

自分も、キリストについて学び、『東洋のキリスト』という書物をあらわした。<sup>13)</sup> 彼は、ヒンドゥ教徒として、宣教師によって伝えられたイエス・キリストは、西欧の神学と文化に染まったものであり、東洋的な精神性の理解の下に、イエス・キリストを理解する必要があることを説いた。(4) S. ヴィウエカナンダ (Swami Vivekananda)。彼は、ネオ・ヒンドゥの指導者であるラマ・クリシュナに従い、神秘的一元論 (Vedantic Advaitism) を主張し、究極的なものとの合一をイエス・キリストの中に見い出した。(5) S. ラダクリシュナン。彼は、ヴィウエカナンダの影響をうけ、哲学者として、近代のインドの知識人に、ネオ・ヒンドゥイズムを体系化した。その主著として、『東洋の宗教と西洋の思想』がある。<sup>14)</sup> 彼は、インドの大統領をもつとめ、国際的にも広く知られたヒンドゥ教の哲学者であった。<sup>15)</sup> (6) マハトマ・ガンジー (Mahatma Gandhi)。彼は、主として、社会的実践家であり、組織的な理論家ではなかったが、ヒンドゥ教の再理解をなし、真理 (satya) と非暴力 (ahimsa) の信念に立って、隣人への奉仕 (swadeshi) に励んだ。トーマスは、ガンジーが英国に滞在中に、聖書を読み、山上の垂訓に学ぶ様になったことに注目し、ガンジーのキリスト理解を論じている。ガンジーは日本でも知られている点もあって、この部分の叙述は一番親しみのあるものとなっている。

### ガンジーとトーマス

これらの六人の近代のネオ・ヒンドゥの思想家に対して、キリスト教の指導者たち (Joshua Marshman, Lal Behari Day, Nehemiah Goreh, Brahma-bandhab Upadhyaya, Manilal Parekh, S. K. Rudra, C. F. Andrews, S. K. George) がそれぞれいかなる応答をなしたかを記述し、トーマス自身の考えをのべている。その態度は、きわめて弁証法的 (dialectical) であるといってもよい。すなわち、そこで扱おうとするヒンドゥ思想の積極的な面を評価すると同時に、キリスト教信仰の視点から批判をなし、彼自身の立場を示唆するという手法を用いている。マハトマ・ガンジーの思想について、トーマスがどのように対応しているかを検討することによって、彼の手法を吟味してみたい。

ガンジーは、その背景においては、ヒンドゥ教のなかでも、敬虔な修練による神秘的合一をとく、敬虔主義的救済道 (bhakti mārga) の流れのなかで成長したが、後には、具体的な行為の実践道 (karma mārga) に自らの立場をおくに至った。この場合の「行為の実践道」は、単なる儀式ではなく、また、善き業ではない。それは、自己の欲望を否定した自己犠牲の行為 (niskāmya karma) といってもよい。その行為は、無暴力 (ahimsa) の姿をとり、そして、目標は真理 (satya) の顕照にあった。

M.M.トーマスは、ガンジーを全面的に支持しているのではない。ガンジーが罪の根源を肉体にあるとして、独身と禁欲を保持しようとする考えや、イエスの山上の垂訓をもって、キリスト教のすべてであるというキリスト教理解などについては、批判的である。この点においては、E・スタンレー・ジョーンズがかつて、ガンジーのキリスト教理解を論じて「マハトマは、主として山上の垂訓にあらわされたイエスの原理に影響されており、……キリストの人格に至っていない<sup>16)</sup>」という批判を、トーマスも支持している。

しかしながら、M.M.トーマスは、ガンジーはそのような限定をもちながらも、インドの近代のヒンドゥ教の復興のなかで、キリスト教の生き方を最も具体的にあらわした人物であったと評価している。ガンジーは、自らの生と死を通し、自己犠牲的な愛の道が、政治的、社会的正義の実現にいかなる影響力をもつものであるかを実証した。キリスト教の山上の垂訓に触発したガンジーの生き方は、個人主義的な古典的ヒンドゥの行為 (karma) を打破して、他者の重荷を負って犠牲となるという社会的な次元へと自己変革させた。さらに、マルチン・ルーサー・キングをはじめ、数多くのキリスト者が、ガンジーの真理に根ざした無暴力の抵抗 (Satyāgraha) の道に多くの影響を受けたことは、社会的状況における宗教対話の有意義な実例として記憶されるべきものと思う。

これらの、ガンジーに対する高い評価にも拘らず、M.M.トーマスは、さきにも指摘したように批判をなしている。その要点は、ガンジーは、山上の垂訓にあらわれたイエスの倫理をみているが、全生涯、とくに、その十字架と復活にあらわれたキリストの人格をみしていないという点にある。とりわけ、トーマ

スは、ガンジーの罪観を取りあげ、罪を肉欲に還元するのではなく、人間にとって、罪は根源的なものであり、いかなる人も、たとえ、敬虔に禁欲的な修練の道を志向するものも、自己を誇とする誘惑に勝ちがたいことを指摘している。

しばしば、M.M.トーマスが社会的実践を主張するあまり、彼は、理想主義的な社会派とみなされている。たとえば、チュービンゲン大学で宣教学の教授である P.バイヤハウスは、M.M.トーマスは、神中心のキリスト教を人間中心にすり換えてしまったと述べている。これは、M.M.トーマスに対する誤解であり不当な評価である。なぜならば、ガンジーのケースでも明らかのように、トーマスが反対しているのは、他者との関係をぬきにした個人的敬虔(bhakti)や知性(Jñana)であった。同時に、彼は、人間の根源的な罪性を認識し、それは、人間のいかなる崇高な倫理的行為によっても超克出来ないもので、ただ、イエス・キリストにある贖罪の働きによってのみ人間の再生のあることを主張している。それ故に、M.M.トーマスにとっては、キリストにある神があくまで中心であり、そして、キリストにある神は、他者と共に生きる神以外の何ものでもないのである。彼は、インドのキリスト教の重要な課題についてこうのべている。

「ガンジーがキリストの倫理と出あうことによって得た洞察を、キリストにある贖罪の教義から再構築することである。」<sup>17)</sup>

ここにこの世における他者との関係を切断した個人的敬虔主義ではなく、また、罪の意識を稀薄にした理想主義的な倫理に基づいた社会活動ではなく、キリストにある神の啓示に応答する社会的責任の道が問われているのである。

### 結びにかえて

M.M.トーマスは、近代インドのヒンドゥ教のルネサンスのなかで、ヒンドゥの思想家たちがイエス・キリストとどう出あい、どのような影響を受けたかを分析し、かつ、それらに対する、彼の批判と評価を語っている。それは、ヒ

インドゥ教とキリスト教の折衷をめざしたのではなく、他者に出あうことによって、いま一度自己の立場を再理解しようとする姿勢である。M.M.トーマスは、今日のアジアにおいて生きた神学の課題としてつぎの四つの点をあげている。

- (1) 生きた神学は、その「場」(context)や「状況」(situation)のなかから生れるものである。もちろん、それは、状況や場に妥協したり、従属するのではない。神学は、状況からのみ生れるのではない。しかし、キリスト教の啓示において、神がキリストにあって、歴史的状況に宿ったことが、示されているとするならば、今日、われわれのおかれている状況における啓示の意味を理解することが生きた神学の課題である。
- (2) 生きた神学の内容は、イエス・キリストにある神が、その状況の中で何をなしているかということを見出すことであり、その状況において、イエス・キリストによってあらわされた真理の意味を明確にすることである。
- (3) 生きた神学の重要な要素は、信徒が、この世の中でいかに生き、そして証をなすかということにかかっている。教会が、この世のなかで隣人たちの苦悩を共に負ってこの世の救いのために働くなから、生きた神学の要素は形成されてくるであろう。
- (4) 生きた神学の形成にあたって、われわれは、正統と異端についての固定化された考えを打破する必要がある。キリスト教の歴史において、異端的といわれたものなから、真理について、新しい理解が生れてきたことをわたしたちは知っている。その点からいうならば、フスにしても、ルターにしても、そしてカルヴァンでさえも、その当時においては異端的なもののみなされた。しかし、かれらは、自分のおかれている状況において、イエス・キリストに対する忠誠心を失うことなく、固定化した従来の教理の枠を破って、啓示の再理解につとめた。それは、一つの神学的な新しい旅路であった。<sup>18)</sup>

このようにM.M.トーマスは、生きた神学の課題を主としてインドの近代のルネサンスの中で検討したが、彼の旅路はわれわれにとって示唆するものが少

くない。

注

- 1) 有賀鉄太郎, 『キリスト教思想における存在論の問題』, 創文社, 1969年。
- 2) 魚木忠一, 『日本基督教の精神的伝統』, 基督教思想叢書刊行会, 1941年, 25頁。
- 3) *Communism and Social Revolution in India*, 1953  
*India's Quest for Democracy*, 1955  
*Cultural Foundation of Indian Democracy*, 1955  
*Human Person, Society and State*, 1957  
*Community Development in India's Industrial Urban Areas*, 1958  
*The Christian Pattern of Family in India*, 1960  
*Christian Participation in Nation Building*, 1960  
*Problems of Indian Democracy*, 1962
- 4) Hans-Ruedi Weber, *Asia and the Ecumenical Movement, 1895-1961*, 1966, p.272.  
K. T. パウロは, ガンジーの親しい友人の一人でインドの民族独立運動に積極的に参加したキリスト者であった。 K. T. Paul, *Christian Leader*, 1938
- 5) H. Kraemer, *The Christian Message in a Non-Christian World*, London, 1939
- 6) P. D. Devanandan, *Christian Concern in Hinduism*, 1961, P. 91
- 7) デバナンドンの著作にはつぎのものがある。  
*Devanandan, P. D. The Concept of Maya*, London, 1950.  
——— *Our Task Today: Revision of Evangelistic Concern*, CISRS, 1959.  
——— *Christian Concern in Hinduism*, CISRS, 1961.  
——— *I Will Lift up mine Eyes unto the Hills : Sermons and Bible Studies*, ed. S. J. Samartha and Nalini Devanandan, CISRS, 1963.  
——— *Preparation for Dialogue*, CISRS, 1964.  
〔Devanandan, P. D.〕 *In Memory of Devanandan*, CISRS, 1962.
- 8) 竹中正夫, 「教会と国家—最近のインドの状況から」『基督教研究』, 第41巻第2号, 1978年3月。  
“Christianity and the Emergency” in *Religion and Society*, CISRS, Bangalore, Vol. XXIV Nos 283, June & September 1977
- 9) M.M. Thomas, *The Acknowledge Christ of the Indian Renaissance*, 1969, xi-xii. 以下 *The Aknowledged* と略す。
- 10) L・B・デイが1863年から1866年の間にカルカッタにおいてなした講演が資料となっている。  
*An Antidote to Brahmanism in Four Lectures*, Culcutta, 1867
- 11) Raja Rammohan Roy, *Teaching of Jesus, The Precepts of Jesus The Guide to Peace and Happiness*, extracted from the Books of the New Testament, 1820

- 12) P. C. Mozoomdar, *The Life and Teaching of Keshub Chunder Sen*, 1887
- 13) P. C. Mozoomdar, *The Oriental Christ*, 1883
- 14) S. Radanakrishnan, *Eastern Religion and Western Thought*, 1939
- 15) ガンジーの伝記としては, Chandran S. Devanesen, *The Making of the Mahatma*,  
Orient Longmans, 1969 がある。
- 16) E. Stanley Jones, *Mahatma Ganahi : An Interpretation*, London, 1948,  
p. 80, p. 105; M.M. Thomas, *The Acknowledged*, p. 226
- 17) *The Acknowledged*, p. 236
- 18) *The Acknowledged*, pp. 306-312